令和４年度第２回日野町総合教育会議議事録

１．日時：令和 5 年（2023 年）2 月 24 日（金）　16 時 00 分～17 時 10 分
２．場所：日野町役場 防災センター 202 会議室
３．出席者
　堀江和博日野町長
　日野町教育委員会：安田寛次教育長、吉澤正義教育委員
　　神川貴子教育委員、本居節子教育委員、吉澤松美教育委員
　庶務：小島 勝企画振興課長、菊地智子企画振興課専門員
　　宇田達夫教育次長、加納治夫生涯学習課長、長谷川毅図書館長、柴田和英子ども支援課長、
　　岩脇俊博学校教育課主席参事、増田武司学校教育課課長補佐
　報告者：日野町幼児教育保育の在り方検討懇話会委員長（水色舎代表）佐々木和之氏、
　　（水色舎助手）綾 牧生氏
４．傍聴人　０人

開会　（企画振興課課長）

町長あいさつ

協議事項

【町長】
　それでは協議事項に入らせていただきます。
　「（１）日野町幼児教育保育在り方検討懇話会中間報告について」をお願い致します。

【柴田課長】
　子ども支援課長、柴田です。皆さんどうもありがとうございます。引き続き宜しくお願い致します。
　かねてより、テーマをいただいておりまして、中間報告の時期に発表させていただくということで、その間、昨年の７月から懇話会の立ち上げをしまして、後に紹介がありますが、延べ 29 回のワークショップと 439 名の方に参加をいただきました。懇話会の方でも熱心に議論をいただきまして、今回中間報告というところまでやってきました。来年、もう一年かけてさらに深く掘り下げをしながら議論を進めていきたいと思います。本日は、在り方検討懇話会の委員長であります佐々木和之様にも来ていただき、先生の方からパワーポイントを使いながら最初は説明をさせていただき、その後意見交換をさせていただきたいと思っております。
　在り方検討懇話会の佐々木委員長は、滋賀県立大学を経て、現在はびわこ学院大学の非常勤講師をされておられます。先生のご専門は住民行政連携ということで、滋賀県内はもとより県外でも様々な取り組みをされておりまして、今回は日野町でお世話になっております。
　それでは早速ですが、先生、どうぞ宜しくお願いします。

【佐々木委員長】
　改めまして、お時間いただきありがとうございます。佐々木と申します。宜しくお願い致します。
　本日の流れですが、大きなワークショップとしてはこの３つがあり、この３つの概要報告と、その

後、まとめ、懇話会の議論、今後の予定と進んでいきます。資料としてはお手元にあります A3 の資料で進んでいきまして、まずこの右半分の説明に入りたいと思います。パワーポイントで説明していきますが、要はこの図表をより詳しく皆さんにご紹介したいと思って細かく分けておりますので、基本的な情報はこちらにあります。

子育てワークショップでどういったことをさせていただいたかと、まず保護者の方にワークショップをさせていただきました。なぜここの部分だけこういったタイトルにしたかと申しますと、「子育ての将来像をどう考えますか？」と、いきなり保護者の皆さんにぶつけても、皆さんは日々の子育てに対峙されていらっしゃるので、そこでいきなり大きな話をしてもなかなかわかりにくいだろうというところがありましたので、まずは「子どもをどこに連れて行っているか」です。連れて行くということには当然理由があるはずなので、そこを掘り下げるために、あえてこういう 8 つのシーンを想起しまして、切り口としては「日々子どもを連れていく場所」「なぜそこに連れていくのか」というところから、「子育てに必要な場所を明らかにする」ということでさせていただきました。

まず連れていく場所としてどういったところが挙がってきたのかをご説明します。幼稚園・保育園があったときに、まず自宅や友だちの家や実家、それから公園関係です。ブルーメの丘であったり、畜産センターのような動物と触れ合える場所もあります。公共施設の図書館や日野駅、それから川やダム。それから商業施設は、まずは日野町内のものが挙がってきています。さらに、町外のショッピングモールが挙がってきています。

こういったものがどういう動機により選択されているのかということを、全部説明すると時間がかかってしまうので、一部分だけご紹介します。

例えば、「子どもの同年代が多い」「ほかの子どもたちとの交流が生まれる」「異年齢交流が生まれる場所に連れていきたい」と思ったら、こういうところに連れて行っています。松尾公園、ひばり野公園。遊具があるかも皆さんチェックされていて、それ以外にも近所の公園を使われています。

「同年代のお母さんに会ってコミュニケーションしたい」というときには、もちろん友だちの家へ行くというのもあるのですが、実は今回ワークショップをやってみてすごくよく出てくるのが松尾公園でして、びっくりしました。かなり大事な公園なのだと思います。

やはり遊具があるかないかというのは皆さんチェックされていて、ワークショップの最中にも、「どこどこの遊具がなくなった」や「どこどこなら遊具が残っている」などのコミュニケーションもありました。

「安いので子どもにねだられても買いやすい」。これも何度も出てきてびっくりしたのですが、「ショッピングセンターのカートの種類が重要、子どもが乗ってくれないと困る」というような話になってきて、百均などを使われているなどもあるのですが、町外の施設がなぜ選ばれているかというと、そういうことと、もう一つ言われているのは、「雨のときに立体駐車場がないと濡れる」という、非常に実利的なことからこういうところが選ばれていて、カートの種類が重要なのだということにびっくりしました。

もちろん、子どもの趣味に合わせたところというのもあります。そこで出てくるもので私が非常に驚いたのは、まず基本的なところとして松尾公園やスポーツの森も出てくるのですが、まず「生き物と触れ合わせたい」はブルーメの丘や畜産センターというところがチェックされていますし、最近だと畜産センターでは触れ合える生き物が減ったので、さらに永源寺や竜王の町外の施設がチェックされています。

図書館は、ものすごく評価が高くて、貸出冊数が無制限ということで、ものすごく本好きの方、お子さんをおもちの方には評価が高かったです。

そして、日野駅が想像外に機能しておりまして、乗り物が好きな子は日野駅に連れて行くのだそう

ですね。親御さんが車で並走して、もう一人の親御さんとお子さんが、例えば八日市まで電車で行き、また合流する。それで飽き足りない場合には貴生川駅に行けば3種類鉄道が見られると、いうような使い方をされているそうで、正直驚きました。

百均はすごくよく出てくるスポットで、実際の親御さんの立場からすると「ねだられても100円で止まる」というのと、意外と子どもにとって人気のものが多いというところがあります。

そして、これは何だかおわかりになりますか？「近い」「じじばばが好き」「私がラク」「昔の遊びを教えてくれる」…ご想像のとおり実家なのですが、これはおそらく日野町の方にとって当たり前なのですが、私は東京都世田谷区出身で両親が田舎から出てきておりますので、当たり前ではないのです。「盆と暮れに帰るところ」です。その点で言うと、今回ヒアリングした皆さんは実家が非常に近いという印象をもちました。

その他にも「子どもの年代により違う」という話がありまして、松尾公園はたいへん人気なのですが、「大きくなると遊具が合わなくなってくる」や「ブルーメの丘は小さいうちは手前で遊べていいのだけれど、大きくなると有料のところをねだられるので避けます」などです。あとは「意外と水遊びができるところがない」や「小さい子が水辺でパシャパシャしたり川に入れるところがないので土山や永源寺に行く」といった意見もあります。今しがた申しあげたとおり図書館利用率が高く、公民館行事やイベントの利用率も非常に高い。ところが、我々もびっくりしたのですが、自然遊び系は極端に少ないのです。これは本当に驚きました。もちろん意識のある親御さんは連れて行っているのですが、こういった結果が得られております。

これを踏まえて、公民館向けワークショップの前に、皆さんのお手元の資料では裏の左側にあります。ここでお聞きしたことは、「近所の子どもたちと普段どのような付き合いがありますか？」「近所の子どもたちとこれからどう関わりたいですか？」「その他」ということにしているのですが、これだと聞きにくいので、大きくはこのような項目でお聞きしました。「皆さんは小さい頃にどんなふうに遊んでいましたか？」「子どもに今遊ばせたい場所はどこですか？」「子どもに出会ってほしいものは何ですか？」「町内の子どもたちと日頃どう接点がありますか？」というようなお話を伺いました。

まず「子どもにとって大切だと思うところを挙げてください」という問いに、出てきたのがこういったところです。注目すべきところは行事が出てきます。かつて子どもだけが参加した行事というのもありますので、そういったところや、公民館もさることながら、集落によっては集会所です。集会所でも色々な活動をしているので、集会所の話も出てきました。かつては溝や田畑、牧場や牛舎、溜池やお寺さんなど、本当に色んな所で遊んでいたのだなということがここからも見えてきますし、川で魚つかみをしたり、そういったことも出てきました。もちろん若い方も若干いらっしゃいましたので、生き物と触れ合える施設や商業施設といった先ほどの保護者ワークで出てきた場所も出てきております。

「これからどう関わっていきたいか」というところで聞いていきますと、まず「自然を生かす」というのがあり、その外側に公共施設、上の方に「行事」「役」「公園」と並んでいるのですが、やはりせっかくの日野なので「自然を生かしていきたい」。そして、「集落、地域のなかでもっと育てるようにしたい」「人任せではない子育てで、子ども目線でよい環境にしたい」とあります。どうも自然体験ということを考えていったときに安全との間でどうバランスをどうとっていくかという問題があるのですが、そういったところもやっていきたい。集落のなかでできることといったらこういう多世代間です。「かつてこういった行事があったときには多世代の交流があった」というようなことを仰っておられました。ただ、その一方、役の負担や行事の負担など、こういったことをやっていこうとするとそういったこともありますし、「公園といえば遊具が存続できるのか」ということも実際に出てきました。

もう一つ、「住みやすさ」という項目が結構出てきていて、これは本当にワークショップをさせていただいて身につまされるような会話が何度かあったのですが、子どもが隣に家を建てたいと言ったときに、「田舎だからこんなところに帰ってくるな」と、「こんな何もないところでどうするんだ」みたいなことを言ってしまっていたと。そうでなくとも都市計画法などの観点で新築ができない場所などもありますので、そういったところから「住みやすさ」を考えたときに、「そもそも住めるのか」「交通の便はあるのか」。また、「住むことに関しての情報が手軽に手に入るのか」「選択肢としてあるのか」。あとは、「町内で子どもが育っていくときにストレートではなく当然失敗することもあるわけだが、そういったときにリカバリーできる場所があるのか」といった言葉が出てきました。

これらを踏まえて、考察してみたのですが、最初の保護者ワークのときに、幼稚園・保育園と自宅関係を除いてみると、商業施設、公共施設、右側の方に若干自然が出ているという感じですね。そして、公民館ワークの結果のこの部分、つまり地域行事と自然となります。

ここで着目したのは「居場所」です。どういうことかと言うと、これら、かつて結構盛り上がっていた、特に子どもだけのものがあり、そこで色々貰えてよいこともあった。今すべての集落でないわけではないのですが、残っていたとしてもかなり大人主導になってしまっているというお話を伺いました。

もう一つ、自然の方に関しては、色々とやり方が変わってきたのもあって、今は手入れなどもしていないので子どもに逆に近づいてほしくないということでした。と、いうことで、実は子どもがたくさんいたこういった場所がなくなっていて、それの裏付けとして保護者ワークの方で見てもそういったものはほとんど挙がってこないのです。私のなかではやはり、日野に住んでいたわけではないので外からの日野のイメージなのですが、「あれだけ自然が近いのだから、子どもはみんなそういうところで遊んでいるのではないか」と思い込みで来たら、実際は、公共施設や商業施設がよい意味で考えれば機能しているのですが、一方で、集落のなかがあまり利用されなくなってきています。しかもそれは生活の変化など、ある程度致し方ない理由もあるのですが、現実としてはそういう状況になっていて、これは「居場所が減っていっているのではないか」というところが一つの私の考察です。

もう一つ、これらを角度から別に分けてみると、「自然と触れ合える場所」「地域で育てるという部分」「戻ってきたくなる」。これは本当によく言われるのですが、もう一つワークショップで心に残った言葉なのですが、「小さい頃から、ここは田舎だ田舎だと子どもに対して言い続けてきて、自分も子育てのときは公共施設や商業施設によく行っていた。それでこの土地に帰ってきたいと子どもたちは思うだろうか」と仰った方がおられて、私は非常に重く感じました。「この地域で育って、ここに帰ってきたいと思うようにするには、この地域の記憶…土に触れたり生き物に触れたり、そういうものがなければいけなかったのではないか」と仰っておられる方がいて、私もとても心に残りました。そういう意味においての「戻ってきたくなる」もありますし、では「戻ってこよう」と思っても物理的に戻れるかという問題もあります。

あとは、「色んなものがあるのですが、どうやってその場所に移動するのか」ということを問われました。非常に魅力的なものはあるのですが。

と、いうわけで、二つのワークを振り返ってみて思うのは、今も昔も何らかの形で子どもないし親子の居場所はあるのですが、少なくともそれは大きく変化しています。そして、失われたものもある程度あります。それをどう受け止めるかというのを我々はこれから考えなければならないところだと思っております。

次に保育者向けワークについてです。こちらは紙の裏面の右側になります。「あなたの思うこんな保育を教えてください」ということで、具体的にはこの２段階についてお聞きしました。おそらく今働いておられていて、本当に色んな困難に直面されているのだろうなと感じました。そういう意味で

色んなワークを体験してきたのですが、保育者ワークではそれと同じくらいの緊迫感を感じた瞬間がありました。表面的には皆さん本当によくワークショップに参加してくださいました。真面目に、誠実に。けれど空気感の厳しさは、そういった本当に厳しい場と変わりませんでした。そういったところでどんなお話が出てきたのかご紹介します。

なぜこの２段階で聞いたのかと言いますと、「こうしてほしい」「ああしてほしい」というのはおそらくたくさんおありになると思うのですが、こういう場で議論するためには、「それは何のためなのか」ということが大事だと思うのです。「何を目指していて、そのためにはこれが必要」という話だと、皆さんとしてもお話が見やすくなるのではと思い、あえて１番を聞いております。

１番なのですが、とても印象的だったのが、皆さん「笑顔」という言葉をすごく使われるのです。示し合わせたかのように。これがすごく大事で、「楽しく」と「笑顔」という言葉をすごく使われていて、それは「誰が」と言うと、子どもも、保育者も、最終的にはもちろん保護者も、みんな笑顔でいられるような保育環境を作ることがすごく大事だと仰っておられました。

ではそれにはどういったことが作用しているのかと言うと、周りに並んでいるものなのですが、ポジティブな話で言うと、他のところから日野に来られた保育士さんが仰いました。「日野というところは、園児を連れて歩いていても、町の人たちが皆さん声をかけてくださる」と。こんなところを歩くなという話ではなくて、「そういうふうに皆さんが挨拶をしてくださるのはとてもよい」というようなポジティブな評価もありました。「地域と交流できる」「子どもが自然と触れ合える」というところは、すごくポジティブな意味でここにつながっているものだと思います。

右側にいきます。右側がなかなか難しい世界になってくるのですが、ここでよく出てきた言葉を挙げますと、「主体的」「一人一人」「のびのび」。このあたりのキーフレーズは何度も出てきました。やはり子どもは一人ひとり個性があります。なので、そういった子たちが「やってみようか」と思ったときにやってみられる、自分で「こんなことしたいな」と遊んでいける。先生方はおっしゃっていたのですが、最近はなかなかチャレンジするのは難しいそうですね。なので、そこを少し手助けして、「挑戦して失敗してもいい」となるのがすごく大事なので、そういった手助けがしたいということです。そういったところで言うと、「挑戦することができる」。それから「一人一人が大切にされている」。その下が「満たされている」「のびのび」。もちろん「安心」。「安心」という言葉もよく出てきたのですが、なぜ大切なのかと言うと、安心してもらえたら、「また明日来たい」と思えるでしょうと。だから毎日通園する意味で、安心できる場所になることがとても大事なのだと仰っておられました。

左下にまいります。「保護者とのコミュニケーション」、そして「保育者同士でのコミュニケーション」。これは今たいへん多くの方が日野町内で働いておられるのですが、パートの方、正職員の方、色んな時間帯で働いていらっしゃいます。私がワークショップをなぜ 11 回も行ったのかと言うと、それぞれのシフトに合わせて開催させていただいたので、これだけの数になってきているのですが、そうするとやはり情報共有が難しいようです。

そして、保育者の皆さんに、一言感想カードを書いていただいたのです。「自分の悩みが自分だけではないと気づけてすごくよかった」という感想を何人も書いておられました。そして、「他の園の先生と交流できてすごくよかった」。「自分と同じように思っている人がいるのを知ることができてよかった」というのが判で押したかのように皆さん書いていらっしゃいました。そういったところからもここが課題なのだろうと思っております。

そして、「ゆったりと関われる」。これは後の課題につながってくると思います。「ゆったりと関われる」とわざわざと書かれるということは、裏側があるということになります。

そして、別に先生方は自己研鑽を怠りたいと思っているわけではなくて、教材研究であったり、「ないものを自分たちで作っていこう」「できないことは自分たちで工夫していこう」「ぜひ研修できる機

会があるなら研修したい」という気持ちをすごくもっていらっしゃったことを付け加えさせていただきます。

では、「叶えるために何が必要ですか」という話に移っていきます。皆さん、ご想像のとおりですが、「人が足りていない」。ただ、ここの「※」で書かせていただきましたが、無尽蔵に人がほしいとは誰も言ってはいません。「適切な人数がほしい」と仰っていました。人だけが子どもより多すぎても決してそれが子どもにとってよいわけではないので、それぞれの園児の人数に合った人がほしいというお話でした。

こうなっている背景は、左側が「家庭支援の増加」「危険・衛生面・コロナ対応による制約」。コロナ対応の以前から、確かに私も子どもの頃、小学校などで道端のヨモギを摘んで草餅にしたりしていたのですが、今はそういうことは許されない世の中になってしまいまして、本当はもっと色々と体験させてあげたいけれど、色んな制約でできないというお話をいただいています。

右側が新たな課題になります。「困りごとを言い出せない」「遊びが見つけられない」「甘えられない」「大人との付き合いしか知らない」「保育時間が長くて疲れている」。あとは「支援が必要な子が多くて十分に関われない」。外国の方がいらっしゃるのですが、「日本語が通じない」とすると微妙なので「言語が異なる」と書かせていただきました。こういったことが、人手が足りないということに拍車をかけていると思われます。もちろん、園舎の問題は、30 年経っておりますので対応年数の問題などもありますし、実際の場所によって狭さの問題は指摘されております。

その結果、この下のところにいくわけですね。「時間がない」「行事に追われる」「書類に追われる」「保育者同士の連携が困難」。そして「待遇」の問題も指摘がありました。結果として、こういったようになります。

ここに一つ付け加えさせていただきましたが、現場の方も、「色々改善を頑張っていただいているということはわかっている」と仰っていました。「色々な書類を減らしていただいたり、そういった努力をされているのはわかっているのだけれど、それ以上に新たな課題が生じてきて、加配や改善がされてはいくのだけれど、結果的に現場の疲弊度は変わってないのではないか」ということをかなりしっかりと示されまして、私としても普通でしたら「ご参加していただきありがとうございました」と言うところなのですが、とてもそんなことが言える空気感ではありませんで、「しっかりと現状として受け止めさせていただいて、報告させていただきます」と。私が勝手に何かを約束できるような問題ではないので、私が責任をとれるのは、こうして皆様にお伝えすることだと思ってそのような聞き取り方をさせていただきました。非常に厳しい空気感であったことを付け加えさえていただきます。

まとめなのですが、一つは、表面の図の話にまいります。表面の左側です。幼稚園・保育園の課題からうちの懇話会はスタートしているのですが、この子育て環境全体を見ていくと、まず幼稚園・保育園が創立するということは子どもの人数がいるということになります。子どもの人数がいるということは、通わせる親御さんの仕事先や就業先がある程度の距離にあるということです。

もう一つ、自宅だけで子育てしているというのはほぼないと思いますので、当然ながら幼稚園・保育園の周囲の色んなところに行って子育てをされるわけですよね。なので、一つ将来像を考えていくときに、例えば保護者ワークなどをしていると、白浜にパンダを見に行ったなど、鳥羽の水族館へ行ったなどがあるのですけれど、それは別に日野町でやらなくてもいい話で、年に数回行ける距離にあればいい話ですが、例えば、小児科であったり、近くにあってほしいものというのはあると思うのです。そうして考えると、集落や町でカバーする範囲というのはどこなのかということと、周りとどういうふうに役割分担するかという…これはあくまで例示なので、小学校・中学校と役割分担することを検討しているという意味ではないです。幼稚園・保育園で全部抱えるという話ではなくて、色々な役割分担があるだろうということを考えたいという意味でこういう図を作りました。細かい点を議論

させていただいたのですが、幼稚園・保育園の今後の在り方を考えるということは、この面全体をとらえていかないと本当に持続性のあるものにならないという一致をみましたので、こういった全体像をご提案する方向で、将来像をお示しする方向で考えたいというのが一点。

もう一つ、先ほどの話なのですが、先ほどの図を見ると、ついつい「人不足さえ解消されれば何とかなる」と思われてしまうかもしれないのですが、私は問題の本質は違うと思っています。こういった社会問題があったときに、これは何なのかと言えば対応策なのです。元はここですよね。人の負荷がかかっているというのは。これは行政だけで何とかなるというわけではないものもかなり入っております。例えば、どこまでを子どもたちに体験させるのかという安全の問題であったり、出る側も、人が足りなくなる要因になっている側にもどういうふうにアプローチをしていくのかということを考えていかないと、結局ずっといたちごっこになり続けかねないので、私たちの懇話会としても、私としましても、「子どもについての新たな課題や家庭支援の増加もあり、子育て環境全体の課題を町民の皆様と共有したい」。これはもう、特に日本は民主国家ですので、子どもの数を強引に増やすなんてことはあり得ないわけですし、こういった個々の問題、家庭が変わってきた色んな変化があるのですが、これはもう行政だけでできるという話ではなくて、これだけもう保育現場が追い詰められている。そして、今回の図で表させていただいたように、人さえ充足させれば何とかなるという話ではなくなりつつあるので、町民の皆さんとこの課題を共有して、どうしていったらいいのかというのを一緒の課題として考えていきたい、というふうに懇話会としては考えていきたいと思っているところです。

今後の予定です。まず着手したいと思っているのは、別に日野町だけが抱えている問題ではなくて、日本全国でこういった課題を抱えているところはあると思います。なので、その事例を探してきて、日野町にうまく応用が利くような方法があるかどうかというのを、まずはしっかりと探っていきたいと思っております。それを探りながら懇話会の皆さんとも、よりよい案を、よりよい将来像を、現地調査や情報収取を踏まえたうえで議論させていただいて、年度の後半には検討したことを、キャッチボールですので、できれば今年ワークショップをさせていただいた場所でもう一度皆さんとお話させていただいて、最終的な将来像につなげていきたいというのが全体スケジュールになっております。

以上で報告を終わります。ご清聴ありがとうございました。

【町長】

佐々木先生、どうもありがとうございました。

それでは次に移らせていただきまして、意見交換とさせていただきたいと思います。

ただ今の報告を受けて、委員さんそれぞれからご質問やご意見がありましたら賜りたく思います。いかがでしょうか。

まず、子育ての色んな取り組みもかねてからいただいています本居委員、最初にお声をお聞かせいただければと思います。

【本居委員】

はい。そうですね、私も仕事上子どもさんに関わることが多いのと、今 0、1、2 歳の子育てをしている保護者の方とよくお話することがありますし、今回のこの在り方検討会に公民館のワークショップで参加させていただきました。保護者向けで参加された方のお話なども聞かせていただいたのですが、どうしても皆さんまだ、現状自分がおかれている立場というか、幼保在り方検討会ということなので、保育園に入れるかどうかとか、これから先幼稚園がどうなっていくのかという、そういうお話をするのかと思って参加された方が多かったようで、実際に参加してみたら「どこへ遊びに行きます

か」という話だったので、これから先どうなっていくのかというところが、もちろんこれから検討していって先の話なのですが、実際今自分が育てているお子さんが幼稚園・保育園に入るとか、小学校に行くというのはもう本当に1年2年の今現実の話なので、そのあたりが、先が見えなかったというお声は時々お聞きしました。ただ、今すぐどうなるのかという話は気になるところではあるのですが、私がこの公民館のワークショップに参加させていただいて思ったのは、地域の皆さん…もちろん参加された方だけですが、地域の皆さんは何とかしたいと、どうしても子どもさんが減っていき、地域によっては地元の昔から続いた行事ごとやお祭りごとが維持できていかなくなるということも現実に感じておられるので、何とか子どもたちがこの町に住んでくれて、これから先自分たちがやってきたことを引き継いでいってくれないかというのは、やはり皆さん考えておられるのだなというのは、参加させていただいてとても感じたところです。そこが、実際に子育てしている世代の方々とうまくつながっていけるとよいなというのは、お話を聞きながら感じさせていただきました。ただ、やはり今どうしても幼稚園よりは保育園…家庭の事情で仕事をしなければならなかったり、何となく世の中が女性も働くという、皆さんそういう方が増えてきたので、何となく働かなければと思っておられる方であったり、少数ではあるのですが少し子どもさんと距離をおきたいという方が、働きたいから保育園に入れたいと。保育園に入れたいという理由がいくつかあるのですが、保育園に入れる人数が限られているので、保育園にどうしても入れないという方の思いが解消されないのが…私が仕事をしているところでは、そういう在宅でおられる方とお話することが多いので、保育園を申し込んでも今年も入れなかったという声をお聞きしたりするので、そこがうまく解消されるような方向が、10 年先ではなくて、今の直近の状態で何かよい方法が見つけられることがよいのかなと感じています。

ただ、保育士さんのワークショップのお話は本当に現実に大変な問題だと思います。預ける側からすれば、保育士の方を増やせば受け入れられる園児が増えるのかという単純なお話ではあると思うのですが、実際に保育されている現場におられる方の声を聞くと、本当に10年ほど前の現場と今の現場では、仕事している時間が倍くらいかそれ以上の仕事量になっていて、それ以上に、神経を使うことが多いというか、保護者に対してなど、そういうことが本当に増えてきているということのようです。ここまでやればいいのかと思っていたらそれ以上を求められたり、逆に、こちらがそうかなと思ってやればやりすぎだったりなど。自分のなかでこうしたいという思いはあっても、考えなければならないことが色々あって、それなら大変なので必要最低限に、保育の時間だけを過ごせればいいというふうになっていってしまうので、やはりせっかくの保育者の方の今の思い「楽しく笑顔でいられる」という現場を作れるところが、そこまでの労力が出せないのがせっかく働いていただいているのにそこが残念だと、今のワークショップの内容を見せていただいて感じたので、そこは改善する一番の問題かと感じました。

【町長】

ありがとうございました。

課長や先生も何かありましたらお願いします。

【佐々木委員長】

ありがとうございます。仰るとおり、おそらくわかりやすい形でやろうと思うと、案を示させていただいて、そこに対して意見をいただくというものなのですが、このやり方は非常に危険だというのが私がこのやり方を提案させていただいた根底にありまして、案を示すというのは、わかりやすいのですが、逆に言えば、「行政はこういうふうなところにもっていこうと思っているのだな」と思われてしまうと思ったのです。なので、まずは、皆さんの現状をしっかり聞かせていただくところから始

めて、先ほどキャッチボールと申しました、要は今回、すべての現場でとった情報があるわけです。それに対して「我々はこう考えてきました」というところから始めないと、そういう話にならないのかと。そして、懇話会を2年がかりで考えていくということがありまして、正直一1カ月後や1年後に対応できるものではないので、比較的ロングスパンの、日野町がこれから10年、20年、少子化が進んでいったときに持続可能性があるようなことを言わなければならないのかと思っておりまして、そちらの方に軸足を置かせていただいているというのは正直あります。

ただ、ご指摘の件は本当に私もそうだろうと思っております。目の前で今困っていることが日々あってそれで暮らしているなかで、こういうワークに参加いただいているわけですから、直近の疑問にお答えできるように、次回工夫したいと思っています。ありがとうございます。

【町長】

ありがとうございます。

では、神川委員さん。

【神川委員】

そうですね。私も公民館向けのワークショップに参加させていただいて、私も日野町のなかでも田舎の方の桜谷という地区に住んでおりますので、この地蔵盆であったり、そういう行事が残る地域に住んでおります。やはり幼少期にこういう経験をするというのは、縦のつながりができるので、子どもにとってもよい経験ができているなと思います。ただ、田舎ゆえに、他の地域から入ってくることを、審査ではないですが、「ここでやっていけるならどうぞ」みたいな受け入れ方しかしないところがどうしてもあって、誰でもウェルカムという状況ではないと、今住んでいて感じるところです。田舎だから地域を守りたいという思いも皆さん強いですし、地域をうまくやっていくために必要なことでもあると思うのですが、受け入れることが難しいことも、どうしてもあるのを感じています。そうなるとどうしても人口が増えていきませんし、そこも課題だと思っています。

保育者向けのワークショップの方も、先ほどお話を伺って、私も保育士の友だちがおりますので話を聞くと、やはりどうしても持ち帰りの仕事であったりなど、普通の企業であれば基本的にないようなことや今はどんどんとなくなっていっていることが、保育現場では、行事などがたくさんあるとその日園で行うことに追われてしまい、結局家に持ち帰って期限までにしなければならない仕事がどうしても出てくるそうです。それをうまくできるように、家に持ち帰るのではなく、仕事として時間内にできるようになっていけば、もう少し働き方も変わるでしょうし、現在は保育士の仕事をしていなくても保育士の資格をもっている方なども戻りやすくなるかと思います。

【町長】

ありがとうございます。

何かコメントがあればお願いします。

【柴田課長】

はい。本当に今言っていただいた、保育現場の仕事の持ち帰りと言いますか、環境を整えるために先生は土日なども家で折り紙や切り紙といった仕事をされています。それを時間中に終えられるというのが理想ですし、我々もそのための体制整備を考えていかなければならないのですが、実際にはそうして仕事を回していただいているのが現状です。本当に担任の先生がしなければならない部分とそうでない部分を分けて、負担を減らせるような、事務負担の軽減を昨年から取り組み始め、主任など

が集まって検討を始めているところです。できるだけ先生は子どもに関われる時間を増やすための対策を進めていかないと現場の疲弊がますます進むのではと、とても危機感をもっております。そのあたり、ご意見をいただいて検討をさらに進めていきたいと思います。ありがとうございます。

【佐々木委員長】
　ありがとうございます。私も、「あの点が」「その点が」「この点が」と改善点がたくさん思いつくのです。しかし、おそらく元を絞らないと無限に湧いてきそうだという気もしておりまして、そこを議論していくのが一つ大事だと思ったのが、今回の報告で述べたかったことの一つになります。
　そして、それぞれの集落で外の人、外でなくてもご自身の家族が帰ってくる場合もそうだと思うのですが、それをどうするのかというのはそれぞれのエリアが考えていただいて決めていただいたらいい問題だと思っており、必ずしも開かなければならないという話ではないと思っています。しかし、そういう選択に応じて、こういう施策もどこにどうしていくのかというのは考えていかなければいけないと思います。幼稚園側や保育園側から見たときに、外に連れて行って自然体験ができるかどうかなど、「もっとそとに連れ出したい」「もっと地域社会に触れ合いさせたい」というお話もいただいているので、そういったことができるのかどうかといったことも合わせて見ていかなければならないと思います。ただ、それを地域に無理強いするのではなく、そういったことをしたいというところとマッチングさせるのが大事かと…必ずしも強制ではないです。各集落がそこは自分たちで考えることだと思っていますので、私はその選択肢が示せたらと思っています。ありがとうございます。

【町長】
　ありがとうございます。
　処遇改善のものは委員さんにはお話しているのですか。

【柴田課長】
　まだ具体的な話はしていません。

【町長】
　せっかく機会ですので情報提供してください。

【柴田課長】
　本当に、人が集まらない状況で、正規職員は過去からかあまり人数が変わっていないのですが、今、正規とフルタイムとパートタイムの 3 つの職種で現場は動いているのですが、特にフルタイムの長時間働いていただく保育士さんが非常に足りないという状況です。やはり家庭をもっておられる保育士さんは、短時間で働けるのが一番バランスがよいということで、フルタイムの方が少ないのです。そのフルタイムの方をいかに集めるかというのが対策の大きな課題でして、取り合いになるのはいけないのですが、日野町と近隣の東近江市、甲賀市と比べて、今まで日野町は低かったのです。「日野の現場は楽しくて働きやすくて」という状況を作るためは、やはり甲賀市、東近江市より今年は少し頭が出る待遇ということで、財政的な部分なども協議をしながら最終町長の判断をいただいて、今フルタイムさんの処遇を、色々手当はあるのですがそこにさらに上げて、手当額で言いますと、担任をしていただいている方は、額も議会中なのですが、月額で 2 万円上げさせていただくと。担任を持たない方であってもさらに 1 万 5 千円上げさせていただくということで、それにより日野町が近隣より少し高い状況にはなったので、それで募集をかけているのですが、実際には今すぐの効果は出ていない

状況です。口コミで「やはり中身が大変」ではいけないと思うので、「働きやすくていいよ」という状況を作るために、処遇の改善からまずさせていただいております。

【町長】
　ありがとうございます。
　では吉澤松美委員さん。

【吉澤委員】
　新米で申し訳ないです。少しピントが外れているかもしれませんが、今のご報告をお聞かせ願って、特に保育者向けのワークショップに出ている、保育現場の保育士の方のお声などを見せていただくと、私は幼児教育の現場はあまり詳しくないのですが、今よくマスコミ等では、小・中・高の学校現場はブラック職場だと出ておりますが、それとほとんど変わらないような状況におかれているということで、大変だなという思いをまずもちました。
　小・中・高でもそうですし、幼稚園・保育園でもそうなのだと思いますが、先生をされている方は「子どもが好きで」という方が大半だと思います。なかにはそうでない方も一部いらっしゃるかもしれませんが、多くの方が「子どもが好きで、子どものために色んなことをしてあげたい」という思いがあるので、どうしても働きすぎる方が多いのです。ですから、そういうところを働きすぎにならないような手立てが必要かと思います。それにはやはり、小・中・高の先生方については色んな方が、かなり声を大にして言う方が多くなってきたので、そのことが知られつつあるのですが、幼稚園・保育園の現場についても、教育が語られるときは小・中・高あたりが語られるのですが、幼保のあたりは皆が過ごしてきた割にはあまり語られないというのがありますので、ここに「子育て環境の課題を皆様に知っていただく」というのがありますが、情報発信をしっかりしていただいて、皆が、子育て世代だけの問題ではなく人類の問題の部分がありますので、情報を皆が共有して、そして何とかしなければならないという思いを致すような方向に、まず情報発信が大事かと思いますので、お願いしたいと思います。
　そして、それを知っていただいて、働いている方々の頑張りすぎを何とかしなければならないと思います。それはやはり先生方に任せきりではなく、子育てという仕事を分担するというか、言葉は悪いですが「お金を払っているのだしお願いします」「学校に預けているのだから」「幼保に預けているのだから」というふうになってしまいがちなのですが、実はそうではなく、家庭でも当然育てなければならないし、地域でも育てなければならないし、専門の先生方のいる学校・幼保でも育てるという、色んな育てる場があるので、しっかりとした役割分担意識をそれぞれの者がもたないと、結局給料をもらって教育をしている方々にしわ寄せがいってしまうことになるので、そこのところも大事かと思いました。ただ、どうしたらよいかと問われると特効薬は思い浮かばないのですが…そういうところが大事かと思いました。

【町長】
　ありがとうございます。コメントをお願いします。

【佐々木委員長】
　ありがとうございます。私の言いたいことをすべて言っていただきました。本当にそうだと思います。子育ては分担だと思うのです。家のなかにおいてもそうですし、社会においてもそうだと思うのです。なぜ私たちが最後に今日のまとめとして「町民の皆さんに知っていただかなければいけない」

と言ったかと申しますと、そこなのです。そこを思考停止しては絶対にダメで、本当に日野町というこの場でどういうふうに子どもに育ってもらうのかという意識を皆にもってもらわないと、幼稚園・保育園の先生方に投げていて何とかなる話ではもうないのです。そこをやらないとまずいと強く思いました。私は元々河川空間づくりの住民情報連携をやっていた人間なのでもっと素人なのですが、今回学ばせていただいて、子どもたちが好きだから先生をされているのだろうという思いで入ったのですが、とても心に残ったエピソードがあるのです。

それは、子どもの育ちに一緒に、同席できるというのがこの仕事の醍醐味だというお話をいただきました。ああ、そうなのかと。育った瞬間、前までできなかったのに急にできた瞬間。本来なら親御さんの前で全部あった方がよいのかもしれませんが、そこに立ち会うことができるというのが最大の魅力なんだそうでして、逆に私が気づかされた話なのですが、本当に共感するお話をいただきましてありがとうございます。

私も特効薬が見つからないので、スケジュールになぜ全国事例の調査を入れたかというと、「これは探ってこないとまずい」という気持ちになったからです。引き続き宜しくお願いします。

【町長】

ありがとうございます。

では、吉澤正義委員さん。

【吉澤委員】

はい。私今困っているのです。何を、どういうことを、どういうふうに、話をするのがよいのかということがまったくわからないのです。私の持論というか、自分の今の思いは、0歳児や1歳児がなぜ保育園に預けられて育っていかなければならないのか、ということをいつも考えます。幼稚園だけで十分ではないのか、保育園に行かなくても親が0歳から3歳くらいまではしっかり育てていける環境…政治だけが悪いのではないと思います。政治も十分ではないと思うのですが、その他にも十分でないところがあるから0歳や1歳で保育園に預けなければならない、というような状況がものすごく私は苦痛で仕方ないです。何とも言いようがなく、自分でもわからないところで今います。

【町長】

いえ、ありがとうございます。

ほかに何かありますか。

【佐々木委員長】

まさしく今仰っていただいたようなことを皆さんと考えるというのが私は大切だと思っておりまして、そこで思考停止しないようにして、本当に、どう子育てしていくのか。例えば、ワークショップのなかで逆説的な話も出たのです。では保護者のための保育を考えたら、では365日24時間保育できるのが最適なのか…そうではないですよね。それは先ほど仰っていただいた分担の話でもあると思いますし、そのベースになってくるのが今仰っていただいたような気持ちだと思うのです。その気持ちを皆さんとどう通わせて、していくのか、というのが私の宿題だと思っておりますので、お気持ちとしては非常に大切なお考えだと思います。ありがとうございます。

【吉澤委員】

いえ、失礼しました。

【町長】
　とんでもございません。
　その他委員さんのなかで何かあればお願いします。

【本居委員】
　本当に皆さんが仰られるように、保育園に入れたいニーズはどんどんと増えているので、では保育園だけにしてしまった方が…というのもありますし、今仰ったように、一番元にあるのは 0、1、2歳のときに、子どもとお家の方との愛着形成がどれだけできているかが、この先大きくなっていくのにいつまでも影響してきます。本当にとても大事な時期ではあるので、そこで親やお家の方と、子どもがどれだけの人と関われたかというのがとても大事なところではあるので、昼間の時間は保育園や幼稚園、夜子どもが帰ってきてからおじいちゃんおばあちゃんや両親、休みの日にはお友だちや近所の人であったり、色んなところが関わっていかないと子どもたちの成長には大きな影響を与えるので、日野町に住みやすいと思ってくれるようになるともっと人が増えていくようになるところだと思うので、そこの体制が整っていけるのが一番よいのかと思います。

【町長】
　ありがとうございます。

【柴田課長】
　ありがとうございます。今のご意見に対しまして、幼児期、特に低年齢児の子育てというのは、人格形成のうえで大変な時期を保育士も一所懸命に考えてやってもらっていると思います。しかし、なかなか保育士同士のコミュニケーションと言いますか、どこまでやってもいいのだろうというところもあって、「ここは様子を見ながら手をかけるところ」「ここは引きながら子どもの力に任せておこう」と、そのあたりも非常に大事なところですし、保育者自身も自分の保育の質を高めていくための研修や、先生同士、先輩後輩からの色んな保育の考え方について、縦の関係もしっかりとしていく必要があります。また、子どもを育てるなかでどれくらいの人数が適切な集団規模であるかということも大事な検討の要素かと感じています。

【町長】
　ありがとうございました。
　最後に教育長から簡単に感想をお願いします。

【安田教育長】
　ありがとうございました。
　佐々木先生からプレゼンしていただいて、町内で本当に数多くのワークショップをしていただいて、内容を集約してご報告いただいて、たいへん勉強になりました。
　保護者の思いもあれば、現場の叫びもあれば…現場の正に叫びではなかったかと思います。空気が凍っていましたか。

【佐々木委員長】
　あのクラスはなかなかないです。

【安田教育長】
　そうですか。

【佐々木委員長】
　はい。本当に私が真剣に立ち会っているというのを見せないと、これは絶対に疑われると思いました。

【安田教育長】
　そうですか。

【佐々木委員長】
　はい。

【安田教育長】
　そういうなかで、現場の先生方も非常に苦労いただいているという、そういう思いを受け止めないとまずいけないと思いました。
　そして、地域の方からも色んな声をいただいて、これからどうしていくのかということを地域の皆さんが自分事として考え始めてくださったという、そういうワークショップをしていただいたのではないかと思います。
　そういうなかで一番ポイントとなったのが、今後の子育て環境の課題を町民の皆さんといかに共有していくのか、というところが令和5年度の新たな課題ではないかというところまで来たのではないかと思います。そういう意味でも、仰っていただいたように情報発信をしていく必要がありますし、役割分担というキーワードも出していただいたと思いながら聞かせていただきました。
　今後の見通しをこのなかにも入れていただいているのですが、具体的にワーキングも含めてどう組み立てていくのかということも、今後知恵を出し合って考えていけたらと思いました。
　ただ、スタンスとして、佐々木先生が仰ってくださったように、行政が案を示すのではなく、皆がゴールとなる方向性を議論して進めていくような、そういうスタンスであるということは皆で共有化していきたいと思いました。
　小・中学校、そして高校、義務教育16年プロジェクトという取り組みをしていますが、小学校に入学するまでの就学前の段階が非常に大事だと思っています。
　日野町の大きな課題として不登校の課題があります。件数がだんだんと増えてきているということがあるのですが、川上からの施策というか、小学校に入るまでの段階でどういうふうな、本居委員が仰ったような愛着形成というようなことも含めて、取り組みをしていくのかというところは、決して学校や園だけに課せられた課題ではないと思います。そういう意味で、皆で考えていくということをしてきたいと思います。単に幼保をどうするのかというふうなだけの課題ではないと、私は思っていますので、頑張っていきたいと思います。

【町長】
　教育長、どうもありがとうございました。
　本当にこれはかねてからの課題だと、私もそうですし教育長もそう思っているなかで、今年度佐々木先生にたいへんご尽力をいただいて、本当にこれだけの数をよくやっていただいたと思います。行くだけでしんどいと思います。それをすべてコーディネートからしてくださったことに、本当に心か

ら感謝申し上げます。

やり方も、今まで合意形成の在り方というのは、行政でよくあるのは、答えありきで住民さんに認めさせるという施策ばかりだったのですが、私は時代としてナンセンスだと思っております。もちろん、そういう一定の決断があることは確かですが、この一年目のプロセスは必要で、まず皆さんからのお声を聞いて、その後我々が「どうですか？」というプロセスは、それを抜きにして「どうですか？」と聞いても「何がわかっているのか」という話に当然なってきます。この一年ご尽力いただいて、また来年さらに一歩二歩進んだ議論になっていくと思いますし、そこはきっちりとそれぞれの立場での意見も聞いて、一定私や教育長の決断も当然必要だと思いますが、そこは中長期的な視野を見ながら最終的に皆が一番笑顔になれる形を頑張っていきたいと思いますので、委員の皆様には引き続き様々なご指導を賜りたく思います。

【小島課長】

はい。皆様、貴重なご意見ありがとうございました。

以上をもちまして第 2 回日野町総合教育会議を終了とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

【全員】

ありがとうございました。